

映画『ショーシャンクの空に』の英文原題を考える：
redemptionが意味するものとは

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4466

映画『ショーシャンクの空に』の英文原題を考える — *redemption* が意味するものとは —

高橋 悟

1. はじめに

『ショーシャンクの空に』（英文原題：*The Shawshank Redemption*）（監督：フランク・ダラボン）は1994年に公開されたアメリカ映画である。この年には『フォレスト・ガンプ／一期一会』や『スピード』、『ライオンキング』など他に衆目を集める作品が公開されたこともあり、本映画は封切り当初はそれほどヒットしなかった。その理由の一つとしては、タイトルの響きや綴りが極めて紛らわしかったことが挙げられている。この点に関しては主人公アンディ・デュフレーン役を演じた俳優のティム・ロビンズも、公開25周年記念のインタビューの中で、当時その作品名を”*Scrimshaw Reduction*”（*scrimshaw* は象牙彫刻などの細工物）,”*Shimmy, Shimmy, Shake*”（*shimmy* は腰や肩を振るダンス）,”*Shankshaw*” などと誤って記憶していた人たちが多くいたことを冗談交じりに明かしている（Huff, 2019）。

その一方で、本作品はその後レンタルビデオなどを通じて次第に高評価を獲得し、四半世紀を経た今日では世界中で最も愛されている映画の一つとなっている。月間で延べ二兆人以上が訪れるインターネット・ムービー・データベース社（IMDb）のウェブサイトによれば、同社の映画部門ランキング（Top Rated Ranking）において、本作品は2019年10月末時点で第一位の座を保っている。

本作品は、スティーヴン・キングが1982年に発表した中編小説『刑務所のリタ・ヘイワース（英文原題：*Rita Hayworth and Shawshank Redemption*）』をベースにしている。しかし映画化に際しては必ずしも小説と同じ題名や言葉を用いなければならないわけではない。ではなぜ監督・脚本のフランク・ダラボンは、女優の名を外しながらも *redemption* という語をタイトルに残したのであろうか。本作品の文脈の中でその語は一体何を意味しているのであろうか。こうした問いについて深く踏み込んで論じた文献

は管見の限り国内外では見当たらない。先行研究の多くは、本作品に通底するテーマについて論じたものであり、そのテーマとは例えば、①希望（渡辺, 1995; 鷺巣, 1995; Sobol, 1996; 姜, 2007; Parse, 2007; 西内, 2009）、②友情（Darabont, 1996; 黒川, 2005; 金澤, 2017; 米林, 2017）、③宗教性（キリスト教的要素）（姜, 2007; Reinhartz, 2013; 服部, 2019）である。その他には本作品の脱獄映画としての獨創性や特徴を分析・抽出したもの（高橋, 2019a）や、主人公アンディの言動や人間関係を分析したもの（國友, 2015; 高橋, 2019b）などがある。

したがって本作品のタイトルに含まれる *redemption* の意味の解釈については、この語に備わる難度や多義性のせいか、むしろ回避されてきたきらいがある。その中で限られてはいるものの数例を紹介すると、濱野（1999）は *redemption* の意味を「救い」「救済」と捉えている。他方、Sánchez-Escalonilla（2005）は「償い」「贖罪」と捉え、むしろ「救い」「救済」の意味としては *rescue* という別の語を用いて区別している。また姜（2007）は「償い（救い）」と併記することによって、その意味の違いに触れることを巧みに避けている。その他、服部（2019）は *redemption* が持ついくつかの意味を挙げつつ、詰まるところこの物語は「罪の赦し」と「救済」を描いていると断定している。このように一部の研究者の見解をみるだけでも、*redemption* の捉え方は一様ではなく、また十分な論考がなされているとは言い難い。しかし本来その作品の本質を最も的確かつ簡潔に表すべきタイトルが、そこに用いられた語によって記憶違いや様々な解釈を生じさせているのはどういふわけであろうか。

そこで本稿では、いったん辞書（英英辞典及び英和辞典）に立ち返り、この名詞の元の動詞 *redeem* の原義を改めて確認し、それが本作品の登場人物の言動にどのように結びついているか、関連しているかについてつぶさにみていくことにする。最終的に本稿は、① *redeem* という語が本作品の中でなに（*what*）を意味しているのか、②なぜ（*why*）この語がタイトルに使われているのか、を明らかにすることを目的とする。

この目的達成のため、本稿では、文字として書かれたテキストの解釈技法（戸松, 2012）を映像上に表現されたテキストに応用し、作品鑑賞を繰り返しつつ、その関連性や適合性を読み解き統合していくという解釈学的アプローチを採用することとする。なお久米（2005）によれば、解釈学とは「テ

キスト解釈の方法と理論を扱う学問」であり、「その場合のテキストとは、文字で表現された文書や文学作品だけでなく、現代では神話や夢、芸術作品など、解釈を要するあらゆる形式の言語作品までも含まれる」とのことである。したがって本アプローチは台詞のある映画作品に関しても十分に適用可能であると考えられる。

2. 『ショーシャンクの空に』(*The Shawshank Redemption*) のあらすじ

本作品は冤罪で投獄された一人の男を主人公としている。彼は妻と間男を銃殺したとして終身刑を言い渡される。舞台はアメリカ東部メイン州の「ショーシャンク」という名の架空の地にある刑務所である。時代設定は1940年代後半から1960年代後半までの約20年間である。彼は獄中で様々な困難や不条理と闘いつつ、持ち前の信念、教養、スキルなどを発揮して徐々に刑務所内で信頼を勝ち得、その一方で人知れず独房の壁から穴を掘り進め、ついに入獄から19年後に脱獄を遂げる。その後、仮釈放中に規則を破り、自分を追いかけてメキシコにやってきた親友の囚人と太平洋の白浜で感動の再会を果たす場面で幕引きとなる。

3. 参照する辞書

本稿では *redeem* という語の原義を確認するため、以下の英英辞典4冊と英和辞典2冊を参照した。これらはいずれも信頼できる出版社から発行されているものである（各辞典の詳細情報は末尾の「参考文献」を参照）。

<英英辞典>

- The New Shorter Oxford English Dictionary
- Oxford Advanced Learner's Dictionary
- Random House Unabridged Dictionary
- Webster's New World Dictionary of the American Language

<英和辞典>

- 研究社 新英和大辞典
- ジーニアス英和大辞典

表1 *redeem* の意味

	辞書の記載	筆者による 7つの大分類
1	<名誉などを> (努力して) 回復する, 取り戻す regain, get back	(1) <元のステータスや状態・物品を>取り戻す
2	<何かを>元の状態に戻す, 原状回復する bring into some (especially former) condition or state; restore, set right again	
3	<競売品・質流れ品などを>買い戻す, 請け出す buy back (a former possession)	
4	<株式・債券・手形などを>現金化する convert (stocks, bonds, etc.) into cash	(2) <何かを自分が欲するものに>換える
5	<クーポン・ポイントなどを>景品・特典に換える convert (coupons, trading stamps, etc.) for a prize, premium, etc.	
6	<債務などを>清算する, 弁済する, 完済する clear/pay (a debt), pay off (a mortgage or note)	(3) <自分が負ったものに対して相応のことをして>償う, 埋め合わせる, 帳消しにする
7	<欠点・過失などを>補う, 償う, 埋め合わせる; 相殺する make amends for, atone for (an error, loss, etc.), compensate for, counterbalance (a defect or fault); offset (some fault, shortcoming, etc.)	
8	<障害物・不利な条件・失敗などからを>救う, 助ける, 助け出す liberate, save, rescue (a person)	
9	(身代金・賠償金を払って) <捕虜・都市などを>救い出す free (a person) from captivity or punishment (especially by paying a ransom)	(4) <人を困難・囚われの身・罪などから>救う, 解放する
10	【神学】(神・キリストが) <人を>罪や破滅から救い出す, 解放する save, rescue, deliver (a person) from sin and damnation	
11	価値ある [やりがいのある] ものにする, 正当化する make worthwhile, justify	
12	<時間・人生などを>有効に活用する, 有意義に過ごす 【例】redeem the time	(5) <何かを>価値あるものにする, 有効に活用する, 改良する
13	改良する, 改善する reform	
14	<約束・義務などを>果たす, 履行する, 実現する fulfill, carry out (a promise, pledge, etc.)	(6) <為すべきことを>果たす, 実現する
15	仕返しする, 復讐する, 借りを返す, 報復する, 仇を討つ avenge, repay (a wrong)	

4. 辞書記載の *redeem* の意味

動詞 *redeem* の意味を上掲の 6 冊の辞典で調べた結果をまとめたものが表 1 の左列である。そこに示された 15 個の分類は意味の精度や抽象度によって増減しうが、本稿では紙幅の制限上、さらに筆者が整理・統合した 7 つの大分類（右列）に沿って考察を進めることとする。

5. 考察

(1) <元のステータスや状態・物品を>取り戻す (regain, get back, restore)

主人公アンディは、若くしてメイン州ポートランドにある銀行の副頭取を務めていた。無実の罪で終身刑の宣告を受け、投獄されたことは、彼にとって絶望以外の何物でもなかったであろう。しかし刑務所はその絶望に輪をかけた理不尽や不条理に満ちた世界であった。彼はその一種の「無法地帯」において、心の安寧を保つため、早期に釣物マニアとしての趣味を復活させる。のちに無二の親友となるレッドという名の囚人に依頼し、ロックハンマーや研磨布を入手する。彼は石磨きに没頭し、磨いた石は独房の窓辺に置いたりチェスの駒として使ったりして自分の心を慰めるのである。このように彼は過酷で劣悪な環境に置かれながらも、人間としての尊厳を取り戻し維持することに努めていたと考えられる。

一方で彼は自身に備わる教養や銀行員として培ったスキルやノウハウを徐々に発揮していく。入所二年後にひよんなことから刑務主任の相続税免除の手続きを代行して以来、彼は刑務官や刑務所長から経理全般のプロとして重宝されるようになる。刑務主任はアンディに対して日常的に暴行を働くボグズという名の囚人を痛めつけて病院送りにし、刑務所長はアンディを洗濯係から図書室係に格上げし、さらに自分の会計係も兼任させる。アンディは自らの優遇された地位を最大限に利用し、州議会に働きかけて刑務所図書室を整備する。それにより囚人たちは清潔な環境で本を読んだりレコードを聴いたりすることができるようになり、彼もまた文化や芸術に親しむ自分を取り戻すのである。

こうして彼は銀行員時代の環境には劣るものの、自分の強みを活かして様々な「仕事」をすることができるようになる。やがて彼は所長の不正蓄財まで手伝われるはめになるが、その裏話を図書室でレッドに話す時の彼は

とても楽しそうで、生き生きとした表情をしている。つまり彼は獄中であっても、自分らしさを取り戻すことができていたのである。

入獄から 19 年後の 1968 年に彼は見事脱獄を果たす。そしてメキシコ太平洋岸のジワタネホという町に行き着き、そこでホテルを開く。彼は再び銀行員として働くことはなかったが、新たな土地でやるべき仕事とその後自分を訪ねてきた親友のレッドを取り戻し、二人で力を合わせてビジネスを展開していくことを予感させるのである。

以上から、*redeem*には「取り戻す (regain, get back, restore)」という意味が包摂されていると考えることができよう。

(2) <何かを自分が欲するものに>換える (convert)

アンディは上述のとおり刑務主任の相続税の免除を無料で手伝うと約束し、それと引き換えに囚人仲間へのビール (一人につき三本) をご馳走させることに成功する。1949 年春のその日を境に刑務官たちの彼に対する印象は「妻殺しの銀行屋」から「有能な模範囚」へと変わり、囚人仲間のそれも「得体の知れない気取り屋」から「勇気ある愛すべき奴」へと変わる。すなわち彼は自身にまわりつく疑心や警戒を自らの力で信頼や敬服へと転換したのである。

彼はまた密かに掘り進める脱獄用の穴を隠すため、独房の壁に女優のポスターを貼る。そして周期的にポスターを新しいものに取り換えながら辛抱強く「時」を待つ。おそらくそれは彼にとって自由な世界への入口に掛けられた暖簾のようなものであったろう。

その一方で彼は、刑務所長の汚職が万一発覚しても捕まらないように、ランドール・スティープンスという架空の人物を書類上で作り出す。驚くべきことにこの人物には出生証明書、運転免許証、社会保障番号などがあり、実在する人物と全く同じ公文書の中に存在していた。そして不正に貯め込んだお金をこの人物の名義で銀行に預けたり株券に換えたりしていく。こうして彼はいわば所長のマネーロンダリングを手伝っていたのである。

しかし、それはアンディが事前に考え抜いて打っておいた脱獄のための布石であった。より正確に言えば、その金融資産は、彼が刑務所の外に出た後に目的地であるジワタネホまで無事辿り着き、そこで新しい人生と仕事を開始するための生活費であり運転資金だったのである。

脱獄執行日の夜、彼は所長室の隣の部屋でいつもの会計業務を終え、ロックハンマーを隠していた聖書及びその他文書を密かに不正帳簿等一式と取り換え、所長室の金庫の中に入れる。そして脱獄後速やかに、囚人服からスーツに着替え、アンディ・デュフレーションからランドール・スティープンスに成り代わって幾つかの銀行を回り、近い将来所長が得るはずであった資産をまんまと我が物にするのである。以後、彼は完全にランドール・スティープンスとなって新しい人生を生きていく。

以上から、彼は「換える (convert)」という行動を明白にとったと考えることができよう。

(3) <自分が負ったものに対して相応のことをして>償う、埋め合わせる、帳消しにする (make amends for, compensate for, counterbalance)

映画の後半に、再審請求の望みを絶たれ、中庭で腰を下ろして失意に沈むアンディのところへレッドがそっと近づき、二人きりで話をするシーンがある。その時アンディは、自分が妻を深く愛していたこと、冤罪という恐るべき不運に襲われたこと、自分の陰気な性格が彼女を死に追いやったも同然であること、メキシコ太平洋岸の町ジワタネホでホテルを開く夢があること、その際に物品調達に長けたレッドが必要になることなどを伝える。そして自分はすでに「十分すぎる程の償いもした」と続ける。しかしそれを聞いたレッドは「そんな夢は捨てろ。夢のまた夢だ」と言下に否定する。ひとしきり言葉を交わした後、アンディはすくっと一人立ち上がって歩き始め、自分の名を呼ぶレッドに向き直り、もしレッドが仮釈放されたら、バクストンという名の郊外の牧草地にある大きな榎の木まで行き、その下に埋めてあるものを掘り出すよう約束させる。

英文スクリプト (アルク英語企画開発部編, 1998) によれば、この時アンディは“(whatever mistakes I made) I've paid for them and then some.”と語っている。この台詞は、自分は妻もその愛人も撃っていないが、たとえどんな過ちを犯していたとしても、有り余るほど多くの償いをしてきた、という意味である。その「多くの償い」とは、例えば、先に述べた刑務主任の相続税免除、刑務官の所得申告や教育資金作り、さらには刑務所長の資金洗浄への手伝いなど、自らの職業的スキルを活用して行った一連の貢献である。また囚人仲間に対しては、図書室整備を通じて彼らが文化や教養、芸術に容易に

接することを可能にした。彼は仲間の乾いた心を美しい音楽で潤し、高卒資格取得を望む者には基礎から学問を教授し、彼らの目標実現のために手を貸した。事の善悪はともあれ、彼は支援を求める者、支援を受けるべき者に対し、人生を豊かにするような持続性の高い支援を誠実に施したといえるであろう。それらが「多くの償い」と彼が発した言葉に相当すると考えられる。こうして彼は、銃の引き金を引いていないにもかかわらず、妻に対する自責の念から多くの利他的行為を實踐し、実際には犯していないものの彼が「罪」と考える負い目ともいうべきものを清算しようとしたと捉えることができよう。そして彼は 19 年に及ぶ陰惨な刑務所生活を帳消しにし、いわば生まれ変わって新しい人生をメキシコで開始しようとするのである。

なお、彼の脱獄後、親友のレッドも服役後 40 年を経て仮釈放を認められる。レッドもまた自身の犯した殺人という罪をこれまでに償い、これからも償っていくことができると更生委員から判断され、一般社会へと戻るのである。

以上述べてきたとおり、アンディ及びレッドに関わる描写から、本作品の原題に含まれる *redemption* の動詞 *redeem* には「償う、埋め合わせる、帳消しにする (make amends for, compensate for, counterbalance)」という意味が埋め込まれていると考えることができよう。

(4) <人を困難・囚われの身・罪などから>救う、解放する (rescue, save, free)

主人公アンディは脱獄を遂げることによって、冤罪ながら終身刑で服役している自分自身を救済し外界へと解放する。そこに至る過程において、彼は次のようなこともしている。一つはすでに言及したが、刑務主任と交渉し、仲間にビールをふるまう機会を実現した場面である。それはほんのひと時のことであったが、仲間の精神を過酷な刑務所生活から解放したのである。レッドはその時の自分たちのことを「自由の身にでもなったみたいだ。シャバのように思えた。我々が神のようにも」と回想している。

彼は図書室を整備することによって仲間が少しでも健やかに服役期間を過ごせるよう尽力し、また放送室からスピーカーを通して刑務所中に美しい音楽を流すことによって仲間の心を癒そうとした。レッドはその場面を「そうとも、あの歌声は心をしめつけた」(アルク英語企画開発部編, 1998) と振り返り、「美しい鳥が訪れて塀を消すかのようだった。短い間だが、皆が自

由な気分を味わった」と言い添えている。

アンディはさらに高卒資格取得を望む者に対して根気強く指導することによって人生の負のサイクルから彼らが抜け出すための支援も惜しまなかった。彼はいわば仲間の人生をその根底から変えることによって救ったのである。

入所後 30 年を経てレッドは定期面接を受けるが、またもや仮釈放不可との判断を下される。その時アンディは落ち込む彼にハーモニカをプレゼントする。アンディは彼が昔ハーモニカを吹いたことがあると聞いていたため、再びそれを吹くことによってわずかながらも彼の生きる励みとなることを望んだのである。このようにアンディはレッドに対して優しい心配りをしたのだが、実はそれ以前にレッドもまたアンディに対して細やかな気遣いをしている。アンディが男色家の囚人たちに痛めつけられ、診療所に入れられている間に、レッドは仲間と一緒にアンディが彫るチェスの駒用の良質な石を集めるとともに、「お帰り。お代は不要」とのメモを添えて、アンディが独房の壁に貼る新しい女優のポスターをそっと差し入れしておいたのである。

獄中であってアンディはまるで「救世主」のように数々の価値を実現し、そして最後に脱獄を果たした。それらの行為は、いわば「地獄」にいる仲間へ希望を与え、彼らの魂を救ったといえるであろう。しかしその一方で彼の魂もまた仲間とのふれあいによって多分に救われていたと考えることができよう。

以上、本作品の文脈から、*redeem* は「救う、解放する (rescue, save, free)」という意味を包含していると捉えられる。

蛇足ながら、最後にアンディが刑務所長に宛てたメッセージを紹介する。脱獄後、刑務所内の不正が何らかの形で新聞社に漏れ、警察の手が自分に迫っていることに気づいた所長は自室の隠し金庫を開けて帳簿を取り出そうとするが、それは帳簿ではなくアンディが持っていた聖書であった。そしてその聖書の表紙の裏には「所長、救いは確かにこの中に (You were right. Salvation lay within.)」と過去形で書かれてあった。実はその言葉は、かつて所長が抜き打ち検査を口実に初めてアンディの独房を訪れ、手に取った彼の聖書を去り際に返す時に言った「救いはこの中に (Salvation lies within.)」という現在形に対する強烈な皮肉だったのである。このようにこの二つの場面では「救い」にあたる言葉としては *redemption* ではなく

salvation が使われていた。

(5) <何かを>価値あるものにする, 有効に活用する, 改良する (make something worthwhile, use something effectively, reform)

収監後 30 年の定期面接で仮釈放不可となったレッドは気落ちし, 休憩時の運動場でアンディに「30 年だ. 長い年月だな」と遠くを見つめながら言う. それに対してアンディは「消えた 30 年. 僕はまだ 10 年」と諦観したように答える.

しかし, アンディは脱獄するまでの 19 年間を決して無駄に過ごしてはいなかった. その期間を自らにとって価値あるものにするとともに, レッドを含む他の囚人たちにとっても各人の刑期を有意義に過ごせるよう献身的に様々なことをした. 既述のとおり, 州議会から予算を獲得し図書室とその蔵書を改善・拡充し, 高卒資格取得を望む囚人には教育を施すことによって出所後の雇用可能性を高める手助けをした.

そして何よりもアンディはレッドと友情を育むことによって互いの服役期間を充実したものにした. 彼らの友情は卑劣な刑務官たちに抗うようにしてより一層強固なものとなり, ショーシャンク刑務所の壁をはるかに越えメキシコへ続いていくのである.

加えて, アンディは獄中であって, 所長の蓄財を手伝うふりをしながら, 実際には脱獄後の自分のために資産運用していたのであり, 合計 37 万ドル超える当時としては破格の「退職金」を彼が悠々と手に入れることができたのも, 逆に言えばこの 19 年という歳月のおかげであったと見ることもできよう.

以上から, 本作品の英文原題に含まれる *redemption* の動詞 *redeem* には「価値あるものにする, 有効に活用する (make something worthwhile, use something effectively)」という意味もまた同時に込められていると考えることができよう.

(6) <為すべきことを>果たす, 実現する (fulfill, carry out, realize)

所長から洗濯係から図書室係へと格上げされたアンディは, ある日食堂で蔵書を増やす構想をいつもの仲間に伝える. 彼らは不可能だと一笑に付すが, 彼の熱意は州議会を動かし, なんと六年後に大量の中古の図書, レコー

ド、小切手 200 ドル分を受け取ることに成功する。さらにその四年後には毎年 500 ドルもの予算を州議会から受け取れるようになり、ショーシャンク刑務所図書室はニューイングランド地方一の刑務所図書室へと変貌を遂げる。このようにアンディは自らの構想をその驚異的な粘り強さで実現したのである。

彼はまた高卒資格の取得を望むトミーや他の囚人に対して教育を施し、最終的に彼の願いを成就させてもいる。

さらに彼は脱獄を果たし、ジワタネホでホテルを経営するという夢まで実現する。その夢は入所中、親友のレッドだけに打ち明けたものであった。先に述べたとおり、この時彼はレッドに対し、仮出所したら郊外にある檜の木の下に行きそこに埋めてあるものを掘り出すよう告げる。結果的にこの約束が一般社会に適応できず悩み苦しむレッドを救うことになる。レッドは意図して罪を犯し、自分にとって居心地の良い刑務所に戻りたいと考えていた時期があったが、その日のアンディとのやりとりを思い出す。そして彼は「**Only one thing stops me. A promise I made to Andy.** (たったひとつのことが俺を引き止めた。アンディと交わした約束だ)」(アルク英語企画開発部編, 1998) と一人つぶやく。

その後レッドは約束を果たすべくその場所を訪れ、埋めてあったもの(箱に入れられた自分宛のアンディからの手紙と旅費用の紙幣)を掘り出す。しかし実のところレッドがその約束を果たす前に、アンディは抜かりなく将来のために手を打っておいたのである。すなわちアンディは、脱獄後メキシコへと一路南下する前に、速やかにその場所に行き、上述の箱を黒曜石の下に隠しておいたのである。つまり二人はそれぞれ為すべきことをきちんと実行したからこそ、最後に感動的な再会を果たすことができたのである。

以上、本作品で描かれた様々なシーンから、*redeem* には「果たす、実現する (fulfill, carry out, realize)」という意味も具備されているといえよう。

(7) <相手に> 復讐する、借りを返す、代償を払わせる (avenge, let someone compensate for)

上の見出しの意味が掲載されている辞書は、今回参照した 6 冊の中では *The New Shorter Oxford English Dictionary* のみである。またそこには "Formerly also" (以前は次の意味でも) と注記されていることから、現

在ではあまり使われていないものの、かつては見出しの意味でも使われていたと考えられる。この点を踏まえて本作品をみていくと、次の二つの場がその意味に相当すると考えられる。

一つ目は、アンディに繰り返し暴行を働いていた主犯格の囚人ボグズが報いを受ける場面である。入所当初の二年間、アンディはボグズたちから日常的に性的暴行を受け、生傷の絶えない日々を送っていた。レッドはその当時のアンディのことを「悪夢の二年間だったろう。これが続いていたら彼は廃人同然に…」と述懐している。しかし先に述べたとおり、1949年春のある日の出来事、すなわちアンディが刑務主任の相続税免除を手伝うと公言して以来、彼に対する周囲の見方は180度変わり、(おそらく彼を重用しようと考えた所長から命令された)その刑務主任は、ほどなくしてボグズを警棒で滅多打ちにする。そしてボグズは囚人用病院へと移送され、二度と自力では歩けず、流動食しか口に入れられない体になってしまう。これによりアンディに安全が訪れるが、彼は決して自らボグズに手を下したわけではなく、そのように周囲を仕向けたわけでもない。むしろ彼の有能さが刑務官たちを動かし、彼らが物理的にボグズに鉄槌を下したのである。その結果、ボグズは自らの悪行の報いを受けた形となる。まさに自業自得であり因果応報であったといえよう。

二つ目は、ボグズの事例とは異なり、アンディ自身が明確な意図をもって刑務所長と刑務主任に復讐をする場面である。閉ざされた「王国」で思うがままに暴政を振るってきた刑務所長と刑務主任を罰するため、彼は証拠品として不正帳簿等一式をロープで足に縛り付けて脱獄する。そして速やかにそれを地元の新聞社へ送付する。これにより彼らの悪事は白日の下に晒され、刑務主任は逮捕され、逮捕を恐れた刑務所長は拳銃で自害する。彼らを追い詰めたのは紛れもなくアンディであるが、この時も刑務主任に実際に手錠をはめたのは警察官であり、刑務所長の命を絶ったのは彼自身である。このようにして彼らもまた自らの悪行に対し自ら清算することを余儀なくされたのである。すなわち刑務主任はこれから始まる服役をもって罪を償うことになり、刑務所長は自ら命を絶つ以外の道を選ぶことができなかったのである。しかし特に所長の自害は短絡的で自己中心的な行為であり、囚人たちが長い期間を経てようやく至る「更生」ではなく、贖罪とは全く性質を異にするものと考えられる。このようにアンディのみならず社会に対して彼らが払う

べき代償は、狡猾で狭量な彼らの想像をはるかに超えて大きかったのである。

なお、アンディが脱獄直前に所長にメッセージを残していたことは先に述べたが、彼はそのメッセージを書いた聖書の中に脱獄用の穴を掘るロックハンマーを隠し持っていた。そのハンマーの形にくり抜かれたページを見て所長は驚き、あまりの衝撃に聖書を床に落としてしまう。それはあたかもその見えざるハンマーによって頭を殴打されたかのようでもあり、大切な聖書を開いたまま足元に落とすという不敬な行為をした所長の偽善者ぶりが象徴的に映し出された瞬間でもあったといえよう。この聖書落下の本質は自身の品性や信仰心などの精神的墮落であったのかもしれない。なぜならアンディの入所当日、所長は到着したばかりの囚人たちを前にして「神への冒瀆は厳禁。神の名を決して汚すな」と厳命さえしていたのである。

以上、本作品を読み解く限り、*redeem*には「復讐する、借りを返す、代償を払わせる (*avenge, let someone compensate for*)」というかつて使われていた意味も十分に埋め込まれていると考えられよう。

6. 結論

本稿は、映画『ショーシャンクの空に』の英文タイトルに含まれる *redemption* という語に焦点を当て、その元となる動詞 *redeem* の意味を探ることを試みた。それに先立ち、英英辞典4冊と英和辞典2冊を参照し、そこに記載された意味を大きく7つに整理・分類した。そのうえで解釈学的アプローチに従って本作品を繰り返し鑑賞し、それら7つの意味をストーリー展開に即して読み解く作業を行った。

その結果、本作品には、①取り戻す、②換える、③償う、埋め合わせる、帳消しにする、④救う、解放する、⑤価値あるものにする、有効に活用する、改良する、⑥果たす、実現する、⑦復讐する、借りを返す、代償を払わせる、という7つの動詞（行動）が物語成立のための必須の要素として随所に織り込まれていることが判明した。したがって、*redeem*にはこれら7つのすべての意味が宿っていると考えることができよう。

このことから、この極めて広範で多義的な語が原題に使われた理由は、豊穡で示唆に富んだ本作品の内容を *redeem*（実際にはその名詞形である *redemption*）以外の語で表現することができなかつたからではないかと思料

される。筆者自身は映画制作者らが *redeem* の意味についてここまで深く語った資料に接したことはないが、逆に言えば彼らの意識下にある無意識がこの語を使う必然性と妥当性を直覚的に選択したと考えてもあながち不自然ではないであろう。

他方、主演のティム・ロビンスが語っているように、この語が原因となって映画の題名を覚えにくくし、大衆にアピールしないものにしてしまったことも一面事実であろう。確かに本作品はその題名の難解さゆえに不評であったと思われる。しかし不発に終わったのは公開当初の数年間に限られたことであり、本作品はその内容が持つ圧倒的な力でじわじわと高評価を得ていく。興味深いことに、いわば「冴えない」タイトルを冠した本作品がそのような静かで控えめな道程を辿るさまは、まるでぼろの囚人服をまとった主人公アンディが揺るがぬ信頼を次第に勝ち得て輝いていくプロセスと重なるかのようである。

参考文献

- アルク英語企画開発部編 (1998) 『映画で覚える英会話 アルク・シネマ・シナリオシリーズ ショーシャンクの空に』, アルク .
- Brown, L. (Ed.) (1993) *The New Shorter Oxford English Dictionary, Volume 2 N-Z*. Oxford: Oxford University Press.
- Darabont, F. (1996) *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York: Newmarket Press.
- Flexner, B. S. (Eds.) (1993) *Random House Unabridged Dictionary* (2nd ed.) New York: Random House.
- Guralnik, B. D. (Eds.) (1980) *Webster's New World Dictionary of the American Language* (2nd College Edition). USA: William Collins Publishers.
- 濱野清志 (1999) 「第 12 章 生きることの価値をもとめて—心理臨床と宗教性—」, 山中康裕・橋本やよい・高月玲子編, 『シネマの中の臨床心理学』, 有斐閣 .
- 服部弘一郎 (2019) 『銀幕の中のキリスト教』, キリスト教新聞社 .
- Huff, Lauren (2019) Tim Robbins reflects on the enduring legacy of *The Shawshank Redemption*, 25 years later, *Entertainment Weekly*,

October 13, 2019.

<<https://ew.com/movies/2019/10/13/tim-robbins-shawshank-redemption-25th-anniversary-interview/>>

(閲覧日：2019年10月31日)

Internet Movie Database (IMDb). *Top Rated Movies*,

<https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nv_mv_250>

(閲覧日：2019年10月31日)

姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.

金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編, 『午前十時の映画祭 8 プログラム』, キネマ旬報社.

小西友七・南出康世編 (2001) 『ジーニアス英和大辞典』, 大修館書店

久米博 (2005) 「解釈学」, 下中直人編, 『世界大百科事典』改訂版, 第4巻, 平凡社.

國友万裕 (2015) 「同性愛映画としての『ショーシャンクの空に』」, 『映画英語教育研究』, 20, 137-147.

黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない! 名映画300選 (外国編)』, 中経出版.

西内誠 (2009) 「"Get busy living or get busy dying": The Shawshank Redemption (1994)」, 『OLIVA』, 16, 97-155.

Oxford University Press (2015) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (9th ed.).

Oxford: Oxford University Press.

Parse, R. P. (2007) Hope in "Rita Hayworth and Shawshank Redemption": A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20(2), 148-154.

Reinhartz, A. (2013) *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.

Sánchez-Escalonilla, A. (2005) The Hero as a Visitor in Hell: The Descent into Death in Film Structure, *Journal of Popular Film and Television*, 32(4), 149-156.

Sobol, J. J. (1996) The Shawshank Redemption: A Review, *Journal of Criminal Justice and Popular Culture*, 4(1), 15-17.

高橋悟 (2019a) 「『ショーシャンクの空に』の脱獄映画としての独創性」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 9, 13-24.

高橋悟 (2019b) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公の魅力を解き明かす:

- Katz が唱えた 3 つの基本スキルの視点から」、『英語と文化：大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 9, 15-24.
- 竹林滋編 (2002) 『研究社 新英和大辞典』 (第 6 版), 研究社.
- 戸松泉 (2012) 「エクリチュールの解釈学: 森鷗外『舞姫』の改稿をめぐって」, 松澤和宏編, 『テキストの解釈学』, 水声社.
- 鷲巢義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.
- 渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンズってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.
- 米林聖 (2017) 「スティーヴン・キング主要作品解題」, 『ユリイカ』, 49(19), 219-239.

映画作品

『ショーシャンクの空に』 (*The Shawshank Redemption*). Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994. Shochiku Home Video, 2007. DVD.

(本稿の中で引用した台詞は、特に記載のない限り、本映画作品の日本語字幕を採用した)